

【司会：瀧澤】

それでは時間になりましたので早速に第 26 回になります、私学高等教育研究所主催によります公開研究会を始めさせていただきたいと思います。私は私学高等教育研究所の主幹をやっております瀧澤と申します。きょうは司会役となっております。よろしくお願いいたします。

お手元に研究会の趣旨を書いている資料がいておると思いますが、今回は「キャリア教育」をテーマにいたしました。最近はかなり大学のキャリア教育を盛んに取り上げる時代になってまいりました。これは就職支援からだんだんと発展してきたケースが多いのだと思います。まだキャリア教育が何であるかの概念規定も余りはっきりしていないところがあります。内容的にもいろいろご意見があるわけです。大学での具体的な取り組みもいろいろあるかと思えます。

私は何でも単純にしたい方なものですからキャリア教育も簡単に一言でいえば職業教育とっていいのではないかと思うのですが、どうでしょうか。職業教育のうち、職業に必要な専門的な技術、知識は専門教育にあたるのだと思います。それ以外の基盤的な教育、一般教育的な位置づけになるかと思えます。職業人として一人前に社会に巣立っていくために必要な基礎的な基盤的な教育がキャリア教育の中身にだんだんとなってきているのではないかと理解しております。

これまで大学は職業教育を正面から受け止めることを非常に避けてきた気がいたします。去年の 1 月に出されました中教審の答申、高等教育の将来像では高等教育の機能を 7 つに分けて多様な発展をするようにとっております。まずは教育研究の拠点になるトップレベルの大学を挙げ、次に高度の専門職業人の養成を挙げ、3 番目に幅広い職業人の養成が書いてあります。ご承知のとおりであります。700 ある大学の大半は、要は 3 番目の幅広い職業教育をやっているのだと思います。

そういう意味で申し上げますれば、職業教育は大学の本来の一番大事な、これだけ大衆化してきた大学、高等教育としては一番大事な教育の部分だと思います。これまで高等教育政策はとかくトップ、上を向いた政策が非常に中心になってきた感じがいたします。最

近でも大学院教育が焦点になってきているわけです。国際的な世界的な拠点であるとか国際的な水準であるとかということが非常に意識されている。肝心の学部教育の方にはなかなか目が向かなかったように思います。

これはご覧になったかと思いますが、最近国大教でキャリア教育についての報告書を出しております。国大教の委員会が検討してきた結果を報告書として出しました。これを読みましたらキャリア教育を今取り上げる理由が書いてありまして、その1番目がキャリア教育は本来大学として正面から取り上げるべきことであった、という書き方が理由としてあります。「べきことであった」という言い方は要するに、べきであったけれどもやってこなかったという反省が含まれているのだと思います。

職業教育は大学はとかく避けてきた。高等専門学校でさえ、というと怒られるかもしれませんが。高等専門学校でも職業教育という言い方は非常に避けてきた。拒否してきたと思います。技術教育といえはいいのですが、職業というは大変に具合が悪かった。

そういう職業という問題に正面から当たることを避けてきた。アカデミズムにとらわれてきたということだったと思います。その結果として大学教育が現実の職業上の必要からはだんだんと離れていった。だんだんと離れていったというよりは近寄らなかったのです。その結果、学生は勉強をする意味がなかなかとらえられない。それから大学生活と社会人としての生活の接続がうまくいかない、スムーズにいかない。そのいろいろな問題が顕在化してきた。

そういうことで今ようやくキャリア教育が大学の中でも盛んに議論されるようになってきた。これは必然のことであると思います。

私ども私学高等教育研究所で昨年からキャリア教育というプロジェクトを1つ立ち上げました。それもそういう気持ちから、学部教育を重視し、そこに改めて目を向けていきたいという気持ちから始めたわけでありまして。きょうは講師としてポール・ゴア先生にお願いしております。通訳をお願いしております川嶋先生、それからコメントをお願いしております濱名先生、お二人の先生はこのプロジェクトの関係者、プロジェクトを担当いただいているお二人でもあるわけです。

そういうことできょうお招きいたしましたポール・ゴア先生ですが、お手元に略歴の資料もあると思いますのでご覧いただきたいと思います。アメリカの民間テスト機関でありますACT、アメリカン・カレッジ・テストのキャリア開発研究部のディレクターをしておられる方です。心理学者であり、キャリア教育の専門家でもあるわけです。キャリア教育という言葉自体、アメリカで生まれたと聞いております。アメリカはキャリア教育の先進国であります。ポール・ゴア先生のお話から私どもキャリア教育をこれから考えていこうという者にとって大変に示唆に富んだお話が伺えるものと期待しているわけであり

ます。

どうかご一緒にお話を聞いていただき、後ほど若干の質問の時間があるかと思っておりますので、活発なご意見もいただければと思っております。よろしくお願いいたします。

それではポール・ゴア先生、よろしくお願いいたします。

【ポール・ゴア Ph. D. (翻訳：川嶋)】

みなさん、こんばんは。まず最初に、瀧澤主幹にお礼を申し上げます。また、このような講演の機会を与えてくださった関西国際大学の濱名学長にも感謝を申し上げたい。さらに、私の通訳の労をとっていただく川嶋教授にもお礼を申し上げようと思います。

今夜、私に依頼されたテーマは、「アメリカ合衆国におけるキャリア教育の現状と今後の展望」ということであります。先ほどの瀧澤主幹の趣旨説明をお聞きしまして、日本とアメリカの状況が大変似ていることに気づかされました。それぞれの国の若者たち、特に大学生を、いかにして社会に貢献できる市民に育て上げていくかについて、両国とも大きな努力を傾注していることが分りました。

日本の皆さんと同じく、我々アメリカの教育関係者も、大学生にキャリアのことを考えてもらうのに大変苦心をしております。とくに、リベラル・アーツ系、人文学を専攻している学生に対してどのような職業に就かせるべきかについては苦勞を重ねております。

アメリカの大学教員も、関心のあるのは自分の研究分野のことだけで、いかに市民を育てるとか、学生の進路や就職のことには全くと言ってよいほど、興味を持ちませんでした。

今晚は、アメリカにおけるキャリア教育の概要をお話し、それに関するいくつかの研究成果を最後にご紹介したいと思います。ご紹介する一連の研究によって、アメリカではキャリア教育が大きく変わろうとしています。

今夜これからお話しするアメリカのキャリア教育の話が、日本の文化や学生にも当てはまることなのかどうかの吟味は、皆さんの課題になります。また、皆さんからご質問をいただくことが、私の今夜の課題にもなります。

それではまず、なぜキャリア教育が今必要なのか考えてみましょう。そのために、最初に米国労働省が集めたデータを用いて、若者の現状を見てみます。そして、それらのデータと大学進学希望の高校生に行った調査を比較してみます。次にキャリア教育に影響を与えているいくつかの理論をご紹介し、皆さんと共有したいと思います。3番目が生徒や学生のキャリアへの関心をどう評価するのかというアセスメントについてお話しまして、4番目にどのようにしてキャリア教育を提供しているかについてお話し、最後に現在のキャ

リア教育に大きな影響を与えている学問的な研究成果についてお話したいと思います。

今のアメリカの若者には野心がないと多くの人が嘆いています。しかし、研究データは全く反対のことを示しています。今の若者は、過去 100 年間で最も野心的で、高い希望を持っている世代です。具体的にいいますと、90%近くの若者が高校を卒業するだろうと答えています。ただし、実際には多くの高校生が中退しています。また 80%近くの高校生が大学に進学するだろうと期待しています。しかし、実際には 30 から 40%は進学していませんし、また進学したとしてもその多くが卒業しないことも事実です。生徒の 70%前後は給与の高い仕事に就くだろうと予想していますし、楽しい仕事につけるだろうとも予想しています。70%の生徒は自宅を所有するだろうと答えていますし、同じくらいの比率で、親よりも豊かな暮らしが可能だと予想しています。つまり、今の若者は野心や期待が大変高い世代であります。

80%から 90%のアメリカの高校生は、何らかの高等教育を受けたいと言っています。しかし、実際には進学者の 50%から 70%しか、学位を得ていません。その理由は、学生の個人特性あるいは将来の希望やキャリア展望と彼らが実際に学んでいる専攻分野の間に大きなギャップがあるからです。キャリア展望と専攻の間の適合性が、学生が中退するかしないか、学位を取得するかしないかと大きな関連があります。

17 歳の高校生の 70%が、とりあえず将来就きたい職業を決めています。しかし、残念なことに彼らを選んでいる職業を精査しますと、比較的少数の特定の職業に限定されています。高校生の多くは、自分の進路をよく理解していると主張しますが、実際には非常に限られた職業を希望しているに過ぎないことになります。

またこのグラフは高校生の教育アスピレーションの高さを示していますが、80%以上の生徒が、将来学士号以上の学位を得たいと希望しています。

我々はこのように、高校生の希望職業についての情報を持っています。また、どれだけ教育を受けたいのかという教育アスピレーションについての情報も得ております。しかし、両者を比較しますと、彼らが希望する職業に求められる学歴を必ずしも希望しているわけではないということが分ります。つまり、希望職業に必要な学歴と実際に希望している学

歴の間に不一致が見られるのです。

このグラフからお分かりのように、一番右側が「アラインメント(一致)」を示しており、45%の生徒は希望している職業に必要な学歴と教育アスピレーションが一致しています。しかし、40%の生徒は希望する職業に必要な以上の学歴を追求しようとしております。逆に15%の生徒は、就きたい職業に必要な教育よりもより低い学歴を望んでいます。

さらに我々は、彼らの希望している職業と、アメリカの労働市場の今後の動向についての比較も行っています。このグラフに示されていますように、多くの生徒はこれから成長が期待されない職業を希望し、逆にこれから成長が望める職業を希望する生徒はかえって少ないことが分ります。たとえば、マネジメントの分野は求人数よりも、学生の希望者のほうが少ない職業であり、同じようにコンピュータ関係の専門職は、学生が希望する以上にこれから多くの求人が予想される分野です。逆に医療関係や社会科学関係の分野では、学生は実際の求人数以上の希望をしています。

生徒の多くは、自分のキャリア決定をする際に家族からの影響が強いと言っています。しかし、学校からの、あるいは教師からの支援やアドバイスは非常に少ないと答えています。なによりも高校生が必要としていることは、学習上のサポートではなくて、むしろキャリアを決めるためのアドバイスやサポートを学校や教師から期待しています。

このグラフからお分かりのように、多くの学生が、キャリアの方向性を決めることが「大変重要である」「ある程度重要である」と答えています。またこのグラフから、キャリア決定に対してどれくらいの支援が必要かという問いに対しては、40%の学生が「中程度」の支援が必要だと答えていることがわかります。

少しスライドを修正しましたので、皆様がお持ちの資料とは少し順番が変わっておりますので、一言申し添えておきます。このスライドから分りますように、わずか3%の生徒しかどの職業がこれから伸びるのかを十分に理解したうえで、職業選択をしていません。50%の高校生はむしろそのような情報を持たぬままに、ただ自分の興味関心だけで、これこれの職業に就きたいと考えています。多くのキャリア・カウンセラーは、もちろん生徒の興味関心はキャリアを決める際に重要であると理解していますが、興味関心の評価と同

じくらい情報を提供することが重要だと考えています。

これまでのデータから分ったことを簡単にまとめますと、生徒たちは教育的にも職業的にも非常に高いアスピレーションを持っています。それから比較的早い時期に将来何になりたいか、どういう職業に就きたいかの決定をしています。しかし、必ずしも労働市場の変化に対応した希望職種選択をしているわけではありません。それから、何らかの支援、サポートを強く必要としている。また彼らの教育アスピレーションと職業アスピレーションの職種との間には、必ずしも整合性があるわけではありません。

キャリア・ガイダンスとかキャリア・カウンセリングは、米国ではおよそ 100 年の歴史をもっています。この 100 年間を通じて主に 3 つの要素をキャリア指導では強調してきました。1 つはまず自己を知ることです。2 つ目は労働市場、労働の世界を知る。そして最後は、情報を有効に活用する。この 3 点をこれまで強調してきました。

これから、自己をどのようにして知るのか。それから労働世界に関する知識をどうやって得るのか。そして、それらの情報が、どのようにして学生や生徒のキャリア決定に影響を及ぼしているのか、についてお話しします。

欧米やオーストラリア、ニュージーランドでは、キャリア教育、キャリア指導に関して、これまで非常に影響力の強い 3 つの理論が確立されています。1 つは「特性-要因理論 Trait-Factor Theory」、2 つ目は「発達論的な理論」、特にキャリア発達の観点からの理論です。最後は「社会学習 Social Learning」、あるいは「社会認知 Social Recognition」に関する理論です。

これらの諸理論は主に西欧の研究者が考案したものですので、日本の文化に必ずしも当てはまらないかもしれません。さらに、アメリカでもこれらの理論にいくつかの限界があることが指摘されていますが、その詳細に立ち入ることはここではできません。しかし、これらの 3 つの理論は非常に影響力が強いものですから、これから簡単に説明したいと思います。

特性-要因理論は、学生あるいは成人にとって、自分の特性と老荘の世界の特性との整合性がいかに重要かを強調しています。キャリア教育の分野がご専門の方には既におなじみ

の名前かと思いますが、主要な研究者はジョン・ホランドという人です。

発達論的な観点からは、いかにキャリアに関する要素を発達させていくのか。あるいは、ベンチマークを利用して、特定の時期にどういうキャリア発達が必要かを図式化しています。

社会認知理論、あるいは社会学習理論は、最も最新の理論であり、どのように興味関心が発達するのか。どのようにして教育的、職業的選択が行われるのか。どのように最終結果が予測できるかに焦点を当てて研究を行っています。

これから少し自己探求についてお話したいと思います。キャリア教育の観点から自己探求とは何かをいいますと、それは自己評価のことです。自己評価では4つの変数を強調しています。1つは興味関心。2つ目は価値観。3つ目が自己能力、効能感、自分の能力に対する自己評価。4番目が実際に持っている能力になります。

重要なことは、学生自身の自己の能力に対する自己評価と、実際に発揮できる能力、この2つを分けることが非常に重要です。最近の研究成果を見ますと、この2つの変数は、生徒や学生の将来の結果を予想するのに非常に大きな影響力を持っているようです。

キャリア・カウンセリングとかキャリア教育は、ある場合には小学校、つまり7歳から12歳ぐらいでも実施されている場合があります。実際には、本格的なキャリア・カウンセリング、キャリア教育は、高校あるいは大学で行われており、高校と大学で行われているキャリア教育は、小学校で行われているものとはかなり内容が異なっています。自己評価の利用、活用については、ほとんどが高校と大学と成人に限定されています。このスライドからお分かりになるように、高校と大学と成人に対して、それぞれどこに強調点を置くかは異なっています。

高校の生徒に対しては、将来のキャリアを探求する、調べることと、それに必要な教育上の準備をすることに焦点が当てられています。大学においては、一方で職業選択に必要な学習を強調していますが、他方、それと同時に職業を選択し、その実現に向けてどれだけ進捗しているかの評価に焦点が当てられます。



キャリアに関する評価の方法はいろいろあります。ここにありますように、1つはカウンセリングで、インタビュー形式で行われます。これは大変インフォーマルなものです。しかし、もっともポピュラーな方法は、筆記方式かあるいは電子式、つまりインターネットやコンピュータを使ったものです。

このスライドにありますように、興味関心の自己診断テストは、非常にたくさんあります。今日は一番上にあります、私の勤務する ACT が開発した UNIACT について、もう少し詳しく説明したいと思います。

アメリカで使われている自己診断テストは、ホランドが開発した6つの性格類型に基づいて職業上の興味関心を自己評価させています。6つの労働に関する性格型は、手を使う仕事が好きかどうか。モノを対象に働くのが好きかどうか。アイデアを考えたり、科学的な仕事したりするのが好きかどうか。芸術的な仕事が好きかどうか。人々を相手に仕事を好むのかどうか。ビジネスを好むかどうか。こういった6つの特性を調べようとするものです。

昨日東京に来る前に奈良にあります「私のしごと館」を見学してきましたが、そこで使われている自己診断の方法もホランドの考えに基づいているようでした。

UNIACT はホランドの6つの次元について、90項目を「好き」「分らない」「嫌い」で答えさせるもので、筆記式のものも、コンピュータを使ったものもあります。私がお配りしたパッケージの中にも UNIACT の資料が入っています。今皆さんがご覧になっているものは、日本マンパワーによって日本語化されたものです。アメリカでは毎年300万人を超える高校生や大学生がこれを使って、自己分析をしています。この職業適性に関する自己診断結果は、大学入学者選考の際に正規の資料として活用されています。

筆記式のほかにインターネット版もありまして、このスライドにあるように DISCOVER というプログラムの中で UNIACT という自己診断のテストを興味ある写真とともに受けることができます。

アメリカの高校と大学で行われているキャリア・ガイダンスの具体的な取組を簡単にご紹介します。まず高校についてです。いろいろな取組方法でキャリア・ガイダンスが行わ

れています。たとえば、スクールカウンセラーが、生徒の教育プランに対して助言を行ったり、あるいは教師がキャリア計画について助言したり、またワークショップやキャリア教育のために特別に設定された授業を受けることもあります。余り頻度は多くありませんが、グループでキャリアについてのカウンセリングを受ける場合もあります。ご承知だと思いますが、コウプ・教育 (Coop Education)、つまり勉強と労働を相互にパートタイムで行うプログラムについてガイダンスを受けることもできます。

しかし、私の主な関心は高校ではなく、大学でどのようなキャリア・ガイダンスが行われているかにあります。問題は、キャリア・ガイダンスのあり方が大学間によって様々で、ある大学ではキャリア教育やキャリア・ガイダンスが非常に体系的に行われていますが、別の大学に行きますと全くキャリア教育がなされていない、ということです。

最も総合的なキャリア・ガイダンスあるいはキャリア教育を行っている大学は、ここにリストアップしています様々な活動や取組の全てまたはそれ以上のことを行っています。多くの初年次セミナーにはキャリア・ガイダンスやキャリア教育の要素が含まれていますし、独立したキャリア・センターやカウンセリング・オフィスがある場合もあります。学生はこれらのセンターを訪れて自己診断やアドバイスを受けることができます。また、3年生、4年生に対して就職活動の支援も行い、大学から社会への円滑な移行を助けています。

さらにアカデミック・アドバイザーが、将来のキャリアとの関連で、どの授業を受けたらよいのかについて履修指導を行います。それからキャリア・ガイダンスのために特別に開催されるワークショップや、単位が得られるキャリア教育の授業も開講されています。そして重要なことは、一人ひとりの大学教員が、自分の教えている授業の中で、そこで学んだことが学生一人ひとりの将来のキャリアとどう結びつくのかを指導することです。

キャリア教育にとって最も重要なことは、どのようなキャリア教育を提供すべきかや、どの自己診断テストが優れているのか、ということではなく、学生が自己診断の結果、分った様々な情報を、自らがいかに有効に活用して自分のキャリア決定に繋げていくのか、ということにあります。私の同僚が研究した結果によれば、非常に体系的な自己診断を受

け、それに基づいてきちんとしたアドバイスを受けた場合でも、50%の学生はすぐにどう  
いうアドバイスを受けたかを忘れてしまっていることが分っています。ここにおられる方  
も同じような経験をされたと思います。

教員にしろ、カウンセラーにしろ、明確な戦略をもって学生たちが自己診断から得た情  
報をもとにして、キャリア探求のために十分にその情報を活用できるようにする。さらに  
次の段階のキャリア探求のそれを活かしていくように学生を支援することが必要です。こ  
こでは、ACTが開発した例を紹介して、自己診断から得た情報をいかにして学生のキャリ  
ア選択に有効に活用しているのかについてお話したいと思います。

大学に進学を希望する高校生は、ご承知のように共通の達成度テストを受けなければな  
りません。ご存知のように2つありまして、私のところの ACT と、ETS の SAT です。  
ACT は単に学力を測定するだけでなく、自己診断も一緒に行うようになっています。今日  
お配りしたパッケージに入っていますピンク色の”Your plan Score Report”が ACT を受け  
た高校生が受け取る成績表です。上半分は学力検査の結果が報告されますが、下半分はキ  
ャリアに関する診断結果が記載されて、これが高校生に戻されます。この成績表の下半分  
にあります興味関心テストの結果から、今度 ACT のウェブページに入りますと、その結  
果を利用して自分の職業選択に必要なテストやアドバイスを受けたり、情報を得たりする  
ことができます。

興味関心に関するテストを用いて各種の情報を活用することを生徒は奨励されますが、  
特に、このスライドにもありますし、成績表の下にもありますが、こういう「労働世界の  
地図 World-of Work Map」を活用することが奨励されます。このスライドのケースで言い  
ますと、この生徒はアイデアやモノを対象として働く職業に関連した情報をさらに集める  
ようアドバイスを受けます。また6つの職業分野の中から機械や電気の技術者を選んだ場  
合は、この分野の具体的な職業名がリストアップされます。さらに、各具体的な職業に関  
するデータベースを参照すると、その職業の平均給与などの具体的な情報を得ることがで  
きます。

なぜこのようなスライドを紹介しているのかといいますと、高校生にとって将来就きた

いと思っている職業と、大学での具体的な専攻がうまく結びつけることができないからです。高校生には、自分の希望する職業のためにどういう専攻に進んだら良いのか、どういうカリキュラムを学べばよいのかが非常に分りにくくなっているからです。現在 ACT は労働世界地図と関連させるべく、大学の専攻地図を開発、作成中です。この専攻地図によって興味関心テストによって得られた情報を、大学での専攻選択に結びつけて自己探求し、将来プランを考えることが可能になります。

もう1つの体系的なキャリア・ガイダンスの仕組みは、コンピュータを利用した総合的なプログラムを通じて行うもので、これも大変ポピュラーになっています。パッケージの中に、DISCOVER というプログラムのお試し版の ID 番号とパスワードが書かれています。インターネットでこれにアクセスしていただきますと、アメリカの職業がリストアップされています。日本にもこれと同じようなプログラムがあるようです。

数多くの実証研究によりますと、このようなコンピュータを利用した職業選択のプログラムを利用する若者はどんどん増えていきますし、利用した若者のほうが利用しなかった若者よりも良い結果を得ているようです。

単に自己診断テストを実施したり、あるいはコンピュータプログラムを利用したりするだけでは不十分です。いかにしてそれらを学生に活用させるかの、その戦略、体系的な方法が重要です。そこでこれらのプログラムを有効に活用するために ACT は「Discover College Curriculum」というプログラムを開発しています。これは今までキャリア・ガイダンス、キャリア・カウンセリングの経験がない人にも、どうやってこうしたコンピュータを利用したキャリア選択を学生に効果的に提供できるかについてのマニュアルです。非常に少人数の学生を対象にした場合から大規模クラスの場合まで、いろいろなケースに対応して、どのようにプログラムを活用したらいいかの方針、指示、ガイドラインが作られています。これらのプログラムは、それぞれの必要性に応じて柔軟に活用できるようにできていますので、日本でも十分利用できると思います。

この今日お配りしたパッケージの中に大学用のキャリア教育のカリキュラムの例を収めた CD-ROM を入れておりますし、同じものを印刷したものも入っています。その一例と

して「Career Family History」というものが入っていますが、これは学生に家族のキャリアを調べさせることによって、家族のキャリアと自分のキャリアとの関係を考えさせるためのワークシートとそのマニュアルです。これ以上このプログラムの具体に入るのは止めようと思います。

これまでの印象によりますと、日本でもアメリカでもキャリア教育は主としてキャリア・ガイダンス、キャリア・カウンセラーの役割だけと考えられてきたようです。しかし、アメリカの最近の動向をみますと、キャリア教育については、キャリア・ガイダンス、キャリア・カウンセラーだけの仕事というよりは、それに加えて教員の仕事でもあり、それぞれの授業の中で提供される内容を通じてキャリア教育が行われるようになってきています。授業あるいは教室がまさしくキャリア教育に最適の場所でありまして、教育内容あるいは皆さんが教えていらっしゃる内容の文脈の中で、それぞれの将来のキャリア、職業を考えさせるのが重要なことです。職業心理学者の私の仕事として重要な仕事は、工学部の先生あるいは社会学部の先生、歴史学部の先生に対して、それぞれの授業の中でどのようにして学生に対するキャリア・ガイダンスとそれぞれの専門分野の内容の学習を行わせたら良いのかについて助言することです。

最初にお話したように、アメリカでは100年ほどのキャリア・ガイダンス、キャリア・カウンセリングの歴史がありますが、その中でキャリア・デベロップメントに関する理論を構築することと、それから自己評価・自己診断の方法を開発することの2つに焦点が当てられてきました。その結果、現在大変優れた理論と自己診断の方法を獲得するに至っています。

30年位前から我々が実際に行っている活動が、本当に学生のキャリア選択に有効に機能しているかどうかについての評価が始まりました。なぜ有効性の評価が必要となったかといいますと、大学長や執行部が、その有効性を示しなさいと求めるようになったからです。その結果は、大変良いものです。

これから研究成果の結果をご紹介しますが、要点を絞ってお話したいと思います。さらに何が最も有効かについてお話したいと思います。といいますのも、我々は時間とかいろ

いろな資源を制約されていますので、ピンポイントといいますか、一番有効な手段、戦略を考える必要があるからです。

これから紹介する結果は、研究の再分析という方法、メタ・アナリシスの手法を用いたものです。ひょっとして会場におられる方にはなじみのない研究方法かもしれませんので、簡単にこれからメタ・アナリシスとは何かを説明したいと思います。メタ・アナリシスは統計的な方法の一つでありまして、具体的な個別の研究結果をさらに評価する方法です。統計的な方法を用いて、個々具体的な研究を分析することによって、ある特定の介入が果たして一般的に効果があるのか、ないのかの判断を可能にするのがメタ・アナリシスです。

キャリア・ガイダンスの有効性をメタ・アナリシスによって分析した結果、学生たちが受けるキャリア・ガイダンス、キャリア介入は、それを受けない学生よりも75%から80%有効であることが分かりました。1980年以降、4つの主要なメタ・アナリシスの研究成果が出ていますが、その結果、大学学長はキャリア・ガイダンス部門に対して、「君たちのやっていることは研究成果に照らし合わせて本当に有効かどうか」訪ねることもできるようになりました。

では次の疑問は、どういう介入が他の方法より、より有効なのか、ということです。メタ・アナリシスによって、有効な介入は1対1のカウンセリング、グループカウンセリング、ワークショップ、コンピュータを利用したものなどが有効であることが分っています。唯一、自分でマニュアル等に従って自己評価していく方法は、余り有効でないことが分っています。それ以外の、1対1、グループ、コンピュータを利用したものは全て何がしかの効果を持つことがわかっています。

キャリアに対する介入は有効であることも分っていますし、個々の提供の仕方のストラテジーも有効であることが分かりました。次に知りたいことは、さまざまなキャリア支援活動の中で何が起きているのか。その起きたことが、結果とどのように結びついているのかについて調べることです。これらの研究課題は非常に実践的なものです。といいますのも、どういう要素をキャリア指導の中に取り込んだら有効な結果がもたらされるのかを示してくれるからです。これからお話しするのは、どういう介入の仕方なのか。あるいはどれと

どれが利用された場合どういう効果をもたらすのかについてです。

介入の戦略の中には、たとえばここにリストアップされているように、ワークブックに記入したり、あるいは何かを書いたりすることも含まれています。メタ・アナリシスの結果、この中の5つの戦略・方法が他のものより有効であることが分かりました。その5つは何か、皆さん知りたいですか。

ここに書かれておりますように、その5つの最も有効な戦略は、職業選択について何かを書かせること。一人ひとりに注意を向けてきちんとフィードバックすること。十分かつ正確な労働に関する情報を提供すること。どんな形であれモデルを利用すること。学生一人ひとりにどのようなサポートが得られるかの情報を与えること。この5つが最も有効な戦略であることが分かりました。

これら5つの戦略をどのように具体化していくかは、それぞれのキャリア・カウンセリング担当者の創造性次第です。ここに紹介しているのは、いくつかの具体例です。これからそれらの一つ一つについてさらに説明をしたいと思います。これら5つの取組の中で、特に私が関係している具体的な取組、さらに大学生にとって重要性を持つものについて、これからお話ししたいと思います。

書くという作業について、最も普及しているのは期末レポートです。その中でも、特にキャリアに関する課題を与えて書かせることが有効です。レポートを書く場合も、3つ目の要素である労働世界についての情報ときちんと関連させて論文を書かせることがより有効な結果をもたらします。

通常、自己診断結果をどう利用するか、どう解釈するかについては集団で説明を受けるわけですが、それだけでは不十分です。重要なことは、その後一人ひとりの学生がきちんと指導を受けるように仕向けること。そこで一人ひとりの学生にきちんとフィードバックを与えることです。これが一人ひとりに指導する具体的な一つのやり方です。

労働界の情報を与えるのは、インターネットの発達によって、かなり容易になっています。先ほど紹介した奈良にある博物館とか、それ以外のいろいろな人々や団体が作った情報源、その全てが必ずしも信用できるとは限りませんが、それらをインターネットを利用

して職業に関するさまざまな情報を集めることは大変容易になっています。

最近の研究成果によりますと、これら5つの重要な要素の中でも、特に労働世界に関する情報を提供するのが最も効果的であることが分っていることを、ここで強調しておきたいと思います。

モデリング、つまり誰かの例に倣うということは非常に重要です。しかし、重要なことは誰が適切なモデルになるかということです。いろいろな機会を活用して適切なモデルとなる人物を学生に紹介することが重要だと思います。もしあなたが歴史学の教員で、しかし学生は医学部へ進学したいという場合にはその先生が有効なモデルとはなり得ないのは当然です。しかし、あなたは意思決定者としての有効なモデルになり得るかもしれません。

最後に支援についてです。アメリカでは障害のある多くの学生にさまざまな支援が行われています。これは障害というマイナス面の良い側面です。学生たちが彼らに必要な情報を与えてくれる、支援をしてくれる人を見つけ、あるいは人間以外の情報源を利用することがあります。具体的な例としては親とか先生とかコミュニティのリーダーといった人たちが、就職活動やキャリア探求のサポートのソースになります。

研究課題はいくらでもあります。その中で最も興味ある研究テーマは、これらの5つの要素のうち1つだけを有するプログラムは、2つ、3つ持っているプログラムと比べてそれくらい有効なのか、という課題です。このグラフを見ていただければお分かりのように、これが線形の関係になるかどうかポイントになりますが、ご覧のようにほぼ線形の関係にあります。つまり5つの要素の数が増えれば増えるほど効果が高くなることが分かりました。もっともこれまで公表された研究には、5つの要素のうち4つあるいは5つ全てを含むプログラムを分析した研究は存在していません。

次に私が最近興味を持ち、またご来場の皆さんもたぶん興味をお持ちのテーマに移りたいと思います。それは初年次教育の中におけるキャリア教育をどう考えるか、ということです。少しばかり日本の初年次教育について勉強しましたが、日本ではますます初年次教育への関心が高まり、いくつかの大学では既に初年次教育を実施していますし、また多くの大学で導入を考えているようです。フレッシュマン・セミナー等の初年次教育セミナー



の中にキャリア教育の要素を入れることは非常に重要で、興味のあることだと思います。といたしますのは、キャリア教育をキャリア・カウンセリングの仕事だけではなく、教室の中に持ち込むことが非常に重要で、有効であると私は考えるからです。

初年次教育とキャリア教育との関係で言えば、次のような問題が興味をひきます。1つはどれくらい初年次教育の中でキャリア教育が強調されているのか。その場合、どのような内容が強調されているのか。自己探求が初年次教育の中で導入されているとすれば、それはどのように提供されているのか。このような問題に関心があります。

キャリア教育が初年次教育にとって非常に重要なことは、たとえばこのような調査によって明らかになっています。それはサウスカロライナ大学の **National Resource Center for First-Year Experience and Students in Transition** が2000年に実施した初年次セミナーの担当者、責任者に行った調査ですが、それによれば、キャリア教育は初年次教育の中でも最も重要な5つの要素の中の1つに挙げられています。

私と指導生が行った初年次教育担当者に行った調査によれば、80%の担当者が何がしかのキャリア教育を初年次教育の授業の中に取り入れていたことが分かりました。初年次教育の授業の中で1学期のうち15%がキャリアに関する内容に割かれていましたが、これは初年次教育の5つの重要な要素の中にキャリア教育が挙げられていたことを反映していると思われまます。

この調査結果には良い面も悪い面も含まれています。といたしますのも、初年次教育の担当者が必ずしも創造的な活動をしているわけではないからです。しかし、確実に確立されたいろいろな活動を行っていることがわかりました。彼らはキャリア指導の伝統的な要素であるキャリアに関する興味、関心、価値観、自己特性、能力、スキルなどについて授業を行っています。彼らはまた職業に関する情報源を提供しています。さらにキャリアの目標を決めるために必要な知識やアドバイスも行っています。

皆さんも覚えていらっしゃるように、私が先ほど申し上げたキャリア・カウンセリングが伝統的に行っていた3つの主要な要素、つまり、自分を知ること、職業世界を知ること、最終的にキャリアに関する決定を行うことが、初年次教育の中でも教員たちが主に行って

いる活動で、それと一致しています。

さらに教育の方法としてやはり伝統的な方法が用いられていまして、テキストを読むこと、書くこと、講義方式、グループでのディスカッションという伝統的な4つの教育方法が採用されています。

この調査結果は、パッケージの中に入っています研究カタログにも記載されているように、私が編者となっている *Facilitating the career development of students in transition* というモノグラフに発表されています。この本を読んでもらうと、これら実際に初年次教育の中で行われている実践と、先ほど申しました5つの重要な要素を比較対照することが可能です。

今日私がお話したことが、皆様に共有していただければ大変幸せに思います。今日私がお話したことは、アメリカのキャリア教育はどういう現状にあるのか。理論がきわめて重要であって、それがキャリア教育の実践にどのような影響を与えているか。また評価の1つの例を具体的にご紹介しました。また単に学生に自己診断させるだけでは不十分であり、それをいかに行動に結びつけるかが非常に大切であることもお話ししました。

もし日本の学生が、今日お話したようにアメリカの学生と同じく高い教育的、職業的アスピレーションを持っているとすれば、それをどのようにして正確な情報と結びつけて確実なキャリア選択に結実させていくのか。情報と職業選択をうまく調節、調和させることが非常に重要なことです。正確な情報を提供することは、非常に重要な要素になります。

これで終わりたいと思います。ありがとうございました。